

軍事史学

第48巻 第3号

巻頭言

軍事史から見る伊豆

佐藤三武朗

平成二十四年度軍事史学会年次大会（第四十六回）が、六月に静岡県三島市に立地する日本大学国際関係学部を会場校として開催されたことは、誠に喜ばしい限りであった。

歴史を見ると、伊豆は軍事の最前線に立たされ続けた。とりわけ三島は、平安古道や鎌倉古道、さらには東海道沿いに位置するため、歴代の武将が三島を通って戦地に赴いた。源頼朝、北条早雲、武田信玄、豊臣秀吉、徳川家康など、数限りない武将が三島と縁を深めた。一五九〇年、豊臣秀吉は天下人となるために、約二〇万の兵士を引き連れて、三島を通り小田原城攻めを行った。外国との関係では、一八五三年、マシュー・ペリーが黒船四隻を率いて、開国を迫った。翌年に再び来航し、下田港に黒船を停泊させた。そして日米和親条約の締結に漕ぎ着けた。一八五六年、タウンゼント・ハリスが初代アメリカ領事として下田に赴任した。不平等条約である日米通商条約の締結を、幕府は強要された。調印締結を指揮した井伊直弼は、天皇の勅許を得ずに調印してしまった。軍事史から見ると、井伊直弼の判断は間違つた行為と言いつてもいい。確かに、勅許を得なかつたことは許されない。しかし、事態は一刻の猶予もない。締結を拒否すれば、武力に勝るアメリカは容赦せずに、江戸を攻撃してくるだろう。幕府は、清国がアヘン戦争で無惨に敗退し、英国から莫大な賠償を科せられたことを知っている。日本とアメリカとの武力の差は、歴然としている。

勝つか負けるか。為政者は国難にどう立ち向かうかを絶えず考えているはずだ。どう使命を果たし、国民の安全と安心を確保するかに、全身全霊を傾けているはずだ。

軍事は現実である。為政者は国家の安泰を第一義とする。平和を志向しつつ、国家の威信が損なわれた際の、窮状を予見しているはずだ。風光明媚な伊豆は、軍事という視点で見ると、また新たな興味をそそる。のどかさの影に、国を思う先人の苦勞を忍ばせている。

（日本大学国際関係学部教授・学部長）